探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：庄原市立西城中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
庄原市立西城中学校	5	74人
庄原市立西城小学校	8	103人

（R3.11.1現在）

１　指導上の課題

令和２年度庄原市が独自に実施した「基礎・基本」定着状況調査の児童生徒質問紙の結果において，「自分の住んでいる地域のことが好きです」の項目は90%を超えていた。反面，次の表の３つの項目は中学校区として，80%を超える状況ではなかった。

	西城中	美古登小	西城小
地域や子供会などの行事に参加しています。	61.5%	60.0%	81.8%
学習の振り返りをするときには，「もっと考えてみたいこと」「もっと工夫してみたいこと」などを考えています。	80.8%	60.0%	72.7%
授業では，課題を解決するために，進んで，資料を集めたり教材をしたりしています。	69.2%	60.0%	54.5%

地域への愛着が必ずしも日常の生活につながっていないことや，主体的に学習に向かう姿勢が十分でないことの課題が見えてきた。それを踏まえ中学校区での総合的な学習の時間における指導上の課題を次の３つに整理した。

・教師自身の地域への理解が十分でなく，地域の状況や魅力を十分に把握した総合的な学習の時間の単元づくりができていない。
・総合的な学習の時間の指導計画の見直しが十分にできておらず，既存のゴールに向かう学習内容になっている。
・これまでの取組により，児童生徒は教師が設定した学習に地道に取り組み，成果を積みあげることができている。反面，児童生徒が自ら学習課題を設定し，課題解決に向けて取り組むような主体的な学習活動を引き出すことができていない。

２　研究の概要

（１）研究テーマ及び研究のねらい

①　研究テーマ

西城町のひと・こと・ものを活かした探究的な学習の創造
～元気な西城町を目指して～

②　研究のねらい

生活科および総合的な学習の時間において，児童生徒が地元西城について多面的に考えるような単元開発を小中学校で取り組む。単元開発においては，児童生徒が地元西城の町民として，地域の課題や地域として目指したいものを自分事として捉え，その課題解決や目標の達成に向け，主体的に探究していく学習活動を仕組む。地域教材や人材を活用しながら学習を進めていくことや外部との連携，校外への取組成果の情報発信を工夫しながら学習を進めていくことで，児童生徒の学習への意欲を高める。また，生活科および総合的な学習の時間を軸として，各教科・領域の学習内容をつなぐ教科横断的なカリキュラムマネジメントを行い，中学校区で育成したい資質・能力の向上を図る。

（２）資質・能力の設定について

中学校区では，育成したい資質・能力を次の①～③として設定した。また，この資質・能力は，児童生徒が常に意識できるよう，資質・能力の具体的な姿を掲示等で示すとともに，教育活動にも位置付けた。次の①～③は中学校で生徒に示した育成したい資質・能力の具体的な姿である。小学校では，児童にイメージしやすくするために，主体性を「どんどん」，協調性を「ほかほか」，課題解決力を「じっくり」と表現を変え，児童に具体的な姿や内容が分かりやすい表現にし，示している。

①　主体性　（どんどん）
・様々なことに自ら進んで参加したり行動したりする。
・生活や学習の中での課題や問題点を自ら見つけ，解決しようとする。

②　協調性（ほかほか）
・仲間の発表や意見をしっかり聞いて，それを参考にし，自分の考えを深める。
・自分とは異なる仲間の様々な意見を大切にしながら，意見の合意に向けて柔軟に取り組む。
・課題解決に向けて，班やクラスでの話合いに積極的に参加し，協力する。また，共に考えたりまとめたりしたことを行動につなげる。

③　課題解決力（じっくり）
・生活や学習の中にある課題や問題点を見つけ，その解決に向けて取り組むことができる。
・課題や問題の解決のために，その方法や手順を考える等，計画的に取り組むことができる。
・課題や問題の解決のために，様々な情報収集や的確な情報選択ができる。
・見方や考え方を変えながら，視点を定めて分析できる。
・相手意識をもち，順序立てて相手に分かりやすく伝わるよう表現できる。
・学習や取組を振り返り，次の学習や取組に活かすことができる。

中学校区の資質・能力の評価は，学期毎または単元毎にアンケートとして児童生徒に自己評価させている。児童生徒は，その評価結果を踏まえ，次の目標設定につなげる。また，教師は，評価結果を分析し，次の指導に反映させる。

（３）取組について

【探究的な学習の充実に向けての取組】

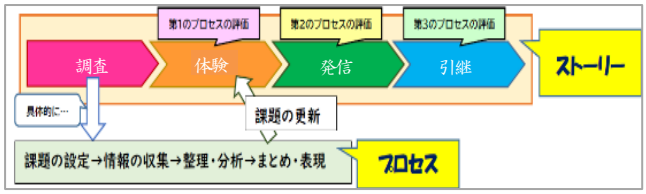
本中学校区の単元づくりでは，２つの工夫をしている。

１つ目が，小中学校共通して，総合的な学習の時間の１つの学習テーマ「郷土を考える」について，各学年の特色やこれまでの取組を踏まえて単元づくりを行っているところである。具体的には，小学校高学年では「つながる」，中学校第１学年「見つめる」，第２学年「探る」，第３学年「創る」をキーワードにして，西城町のひと・こと・ものを活かした探究的な学習活動となるよう，地域資源の活用を図りながら取組を進めている。

２つ目が，単元構成の工夫である。１つの単元全体をストーリー，その単元を構成する小単元をプロセスと定義し，単元づくりを行った。プロセスは，総合的な学習の時間の探究の過程である「課題の設定」，「情報の収集」，「整理・分析」，「まとめ・表現」の４つで構成している。ストーリーのゴールに向け，１つ１つのプロセスの取組を課題更新しながら積み重ね，連続したプロセスでの取組により児童生徒の資質・能力を高めていくこととした。

例えば，中学校第２学年のストーリー「西城元気サポーター」では，働く意義や地元で働く人々の思い，取組を探るために職場体験学習を行い，そこでの学びを発信することで地域貢献につなげた。プロセスは，次の４つを設定した。

〇働く意義についての調べ学習 → 〇地域の事業所での職場体験 → 〇職場体験での学びの発信 → 〇下学年への取組の引継ぎ



また，小学校第３学年では，地元での農業体験をきっかけに，農作物を栽培する取組を行った。そのプロセスの中で，失敗をさせないようにするのではなく，児童が次のプロセスにおいてその失敗を踏まえ，試行錯誤することで課題解決していく取組とした。

【小中連携の取組】

①　研究推進協議会の開催

年度当初はコロナ禍で研究協議会をもつことができなかったため，中学校の推進リーダーが小学校の研究担当教員と連携し，中学校区での研究の方向性の共有化を図った。２学期以降は，定期的に推進協議会を開催し，研究の進捗状況と今後の取組について協議を行った。

②　校内授業研究会の開催

年度当初に総合的な学習の時間の授業研究を計画し，小中合同で授業研究を行うことにした。授業研究会には，研究推進メンバーが参加することにした。小中互いの取組の良さを知り，また今後の取組につなげるために，他の教職員の参加も進めている。

【資質・能力の評価】

３つの評価方法を設定し，取組を進めている。

①　毎時間の評価

本時の目標に対する児童生徒の姿を資質・能力の観点で評価する。B規準を決めて，A，B，Cで評価する。

②　プロセスの評価

プロセスを１つのまとまりとして，児童生徒の変容等を評価する。具体的には，プロセスでの学びや変容を，次のプロセスの取組の中で多面的に評価する。例えば，１つ目のプロセスの評価は，２つ目のプロセスの取組の中で，１つ目のプロセスでの学習をどのように活かしているかを見取り，評価する。具体的な児童生徒の姿を４段階に設定し，A，B，C，Dで評価する。

③　ストーリーの評価

ストーリー全体を通して資質・能力を総括的に評価する。授業の評価，プロセスの評価に加え，児童生徒のポートフォリオ等を活用して評価する。学習の成果を積み重ねた毎時間のワークシートと振り返り，各プロセスの終末の振り返りをポートフォリオ等とする。プロセスごとにポートフォリオ等を蓄積し，評価する。A，B，Cの３段階で評価する。

３　実践事例

【探究的な学習の充実に向けての取組】

①　地域のゲストティーチャーを活用

初期のプロセスにおいて地元で活躍されている方をゲストティーチャーとして招聘し，西城町に対する思いや地域活性化に向けた取組を聞く機会を設定した。その学習活動を通して，児童生徒は主体的に地域課題や地域として目指したいものを捉え，探究活動を進めていくことができた。例えば，中学校第２学年では，Uターンにより西城に帰られ，長年地域活性化に取り組まれている方から自身のこれまでの歩み等を講話いただき，職業観だけでなく，地元で働くことへの思い，地域での自分の役割等について学んだ。その学びを活かして職場体験学習に臨んだことで，改めて地元の農産物の魅力に気づき，生産者の方からの仕事や地元西城に対する思いと願いを受け止めることができた。それが職場体験先及び地域に生徒自らが貢献しようとする力となり，地域の農産物の魅力と生産者の方の思いをＰＲ動画としてまとめ発信する活動を生み出した。

②　様々な体験を課題解決の力に

児童生徒の活動の場を広げるために，様々な体験を設定した。例えば，小学校第３学年では，地域での農業体験を設定し，自分たちでも作りたいという児童の思いを出発点に，地域の生産者のようなおいしいとうもろこしを児童自らが作ることを目標にして取り組んだ。この学習過程の中で指導者は，失敗体験を敢えてさせ，児童の試行錯誤を促した。児童は，収穫前に鳥獣被害を受けたことも，新たな課題解決に向けての取組に変えることができた。体験を通して経験を積み重ねたり，新たな発見をしたり，新たな課題へ向けて挑戦したりと多様な取組にすることができた。

４　研究の成果と課題等

（１）成果

・コロナ禍で制限がある中でも，昨年度と比較し，児童生徒の地域行事への参加に対する意識は高くなった。また，教職員も地元の活動に関心をもち，それを教育活動につなげて活かそうとする意識が高くなった。
・児童生徒の取組を振り返る力，情報収集及び情報活用能力の肯定的な自己評価，自ら課題を見つけ，解決しようとする態度の肯定的な自己評価は，小中共に学年が上がるごとに高くなった。
・小中学校の教職員で連携を図りながら，資質・能力の３つの評価方法や児童生徒アンケート及び教職員アンケートを作成・実施することで，資質・能力の育成に向けての具体的な取組を進めることができた。
・総合的な学習の時間の年間計画を見直し，テーマ「郷土を考える」の新たな単元を作成する等，PBL（プロジェクト型学習）の考え方に基づく単元づくりを小中学校で進めることができた。
・コロナ禍で制限される中でも，工夫しながら取り組み，学習発表会（小学校），総合的な学習の時間発表会（中学校）では，児童生徒の目指すゴールへ向けての取組経過や成果を表現し，発信することができた。

（２）課題

・児童生徒の主体性に関するアンケート項目の肯定的な自己評価，課題解決力（計画的に取り組む力）の肯定的な自己評価が全体的に低い。
・PBL（プロジェクト型学習）の考え方に基づく新たな単元づくりでは，計画を見直しながら，また新たな評価方法や評価計画を作成しながらの取組となった。PDCAサイクルに基づく改善と各取組のつながりを整理する必要がある。
・中学校の教職員アンケートでは，ペア・グループ活動への指導や支援の項目での肯定的な自己評価が低い。コロナ禍で制限がある中ではあるが，授業づくりでの組織的な取組が必要である。

（３）今後の改善方策等

・生活科および総合的な学習の時間を核として，各教科等の学習をつなぐ教科横断的な年間指導計画を作成し，授業づくりの取組に活かす。
・PBL（プロジェクト型学習）の考え方に基づく新たな単元づくりを，児童生徒の主体性の育成をキーワードにして行う。
・小中学校相互の取組の良さを活かした研究推進を図る。